

とうきょうと でんとうこうげいひん でんとうこうげいし 東京都の伝統工芸品・伝統工芸士について

〇〇小学校 〇年〇組 伝統 太郎

とうきょうと でんとうこうげいひん 東京都の伝統工芸品は、どんなものなんだろう？

①ほとんど機械を使わず、手作業で作られる。

②100年以上前から変わらない作り方で作られる。

③100年以上前から変わらない材料で作られる。

④東京都内で一定の数の人々が作り続けている。

①～④の全てを満たし、東京都知事が指定したものをいいます。

げんざい ひんもく とうきょうとでんとうこうげいひん してい
現在、41品目が東京都伝統工芸品に指定されています。

とうきょうとでんとうこうげいひん でんとう っ
東京都伝統工芸品には、伝統マークが付いています。



でんとう
伝統マーク

とうきょうとでんとうこうげいし ひと 「東京都伝統工芸士」はどんな人たちなんだろう？

①東京都伝統工芸品を15年以上作り続けている。

②伝統工芸品を作るための高い技術をもっている。

③伝統工芸品産業が世の中に広まるための活動をしている。

①～③の全てを満たし、東京都知事が認定した人たちをいいます。

東京都にはどんな伝統工芸品があるんだろう？

東京都の伝統工芸品は、41品目が指定されています。

- | | | |
|-----------|----------------|-----------------------|
| ① 村山大島 紬 | ⑮ 江戸象牙 | ⑳ 東京打刃物 |
| ② 東京染小紋 | ⑯ 江戸指物 | ㉑ 江戸表具 |
| ③ 本場黄八丈 | ⑰ 江戸簾 | ㉒ 東京三味線 |
| ④ 江戸木目込人形 | ⑱ 江戸更紗 | ㉓ 江戸筆 |
| ⑤ 東京銀器 | ㉔ 東京本染ゆかた・てぬぐい | ㉕ 東京無地染 |
| ⑥ 東京手描友禅 | ㉖ 江戸和竿 | ㉗ 東京琴 |
| ⑦ 多摩織 | ㉘ 江戸衣裳着人形 | ㉙ 江戸からかみ |
| ⑧ 東京くみひも | ㉚ 江戸切りこ | ㉛ 江戸木版画 |
| ⑨ 江戸漆器 | ㉜ 江戸押絵羽子板 | ㉝ 東京七宝 |
| ⑩ 江戸籠甲 | ㉞ 江戸甲冑 | ㉟ 東京手植ブラシ |
| ⑪ 江戸刷毛 | ㉟ 東京籐工芸 | ㊱ 江戸硝子 |
| ⑫ 東京仏壇 | ㊲ 江戸刺繍 | ㊳ 江戸手描提灯 |
| ⑬ 江戸つまみ 簪 | ㊴ 江戸木彫刻 | ㊵ 東京洋傘 |
| ⑭ 東京額縁 | ㊶ 東京彫金 | (平成30年4月1日現在。順番は指定順。) |

★ 平成30年3月に㉔「東京洋傘」が新たに

東京都の伝統工芸品に指定されました。





むらやまおおしまつむぎ
①村山大島 紬

めんおりもの めんおりもの すながわふとお
綿織物の「村山紬 絣」と絹織物の「砂川太織り」が
ゆうごう めいじじだい むらやまおおしまつむぎ つく た
融合し、明治時代に村山大島 紬 が創り出されたとされ
ます。がら ほ いた かすりいと ま つ みぞ せんりょう なが
柄を彫った板に 絣 糸を巻き付け、溝に染料を流
し込んで染め上げる、板締め染色と呼ばれる独特の技
こ そ あ いたじ せんしよく どくとく わざ
が特徴です。



とうきょうそめこもん
②東京染小紋

えどじだい ぶし き かみしも こま もんよう そ
江戸時代、武士が着る 袴 には細かい紋様が染めら
れるようになり、やがて大名ごとに決まった紋様が使
われるようになりました。大名の武家屋敷が江戸に集
まったことで、江戸での小紋の需要が高まり、やがて
ちやうにん ひろ
町人にも広まっていきました。



えど きめこみにんぎょう
④江戸木目込人形

きやうと かみがもじんじゃ つか たかはしただしげ さいき よざい
京都の上賀茂神社に仕える高橋忠重が、祭器の余材
にんぎょう つく はし どうたい すじほ
で人形を作ったのが始まりとされます。胴体に筋彫り
を入れて服の端を押し込み、衣装を着ているように
した お こ どうさ きめ こむ
仕立てます。この押し込む動作を“決め込む”という
ことから、木目込人形と呼ばれるようになりました。



とうきょうぎんぎ
⑤東京銀器

えどじだい かくだいみょう ぜんこく あつ えど おお
江戸時代、各大名が全国から集まった江戸には、多
くしよくにんの職人が集まってきました。銀しろがねし師と呼ばれた銀器ぎんぎ
職人しよくにんや、くしゃかんざし、神輿金具みこしかなくをつくかざしよくにん職人が
とうきょうぎんぎ きそ きす
東京銀器の基礎を築きました。



とうきょうてがきゆうぜん
⑥東京手描友禅

ゆうぜんぞめ ねん きょうと みやざきゆうぜんさい はじ
友禅染は1680年ごろに京都で宮崎友禅齋が始めた
といわれています。各地かくちから職人しよくにんが江戸へ移り、発展
していきました。

とうきょうてがきゆうぜん こうそう したえ いとめのり お いろさ
東京手描友禅は、構想・下絵・糸目糊置き・色挿し
など、ほぼ一人ひとりで作業さぎょうするのが特徴とくちょうです。



たまおり
⑦多摩織

くわ みやこ よ はちおうじ あきがわ あさかわ せいりゅう
「桑の都」と呼ばれた八王子は、秋川・浅川の清流
にかこかこまれ、ふるふる古くから養蚕ようさんが盛さかんでさまざまさまざまおりものおりものが織おられ
てきました。今日では御召織おんち・風通織おめしおり・紬織ふうつうおり・絹織つむぎおり・縞織もじ・おり織おり・
かわ つづり そうしょう たまおり
variety of the total name is Tamawori.



⑧ とうきょう くみひも
東京くみひも

ぶっきょう でんらい きょう まきもの け さ 其のこ
 仏教の伝来にもなうお経の巻物や袈裟、その後
 きそく れいふく ぶ し たいとう かぶと よろい かたな つかまき
 貴族の礼服、武士の台頭により兜や鎧、刀の柄巻な
 はばひろ つか え どじだいこうき じょせい
 ど幅広く使われてきました。江戸時代後期には、女性の
 おび
 帯じめとしても使われるようになりました。



⑫ とうきょうぶつだん
東京仏壇

え どじだい ばくふ ぶっきょう ほ こ ちょうにん ひろ
 江戸時代、幕府は仏教を保護し、町人にも広まり
 ました。とうきょうぶつだん ねんごろ くわ けやき
 東京仏壇は、1680年頃から桑・櫟などの
 もくざい つか とくじ わざ もち りょうしつ ぶつだん つく
 木材を使い、独自の技を用いて良質な仏壇を作ったの
 はじ
 が始まりとされ、その技術は今に受け継がれています。



⑬ え ど かんざし
江戸つまみ簪

ちい ぬの お く あ
 小さな布きれを“つまんで”折り、組み合わせるこ
 とで はな とり した かんざし
 とで花や鳥などに仕立てることから、つまみ簪とい
 なまえ つ え どじだいまっき うきよえ とうじ
 う名前が付きました。江戸時代末期の浮世絵や、当時の
 しょもつ かんざし おも びょうしゃ み
 書物に、つまみ簪と思われる描写が見られます。



⑩江戸指物

きょうと さしもの ちょうてい くげ さどうよう みやび わび
 京都の指物は、朝廷・公家・茶道用の“雅”や“侘”
 の用具として愛用されたの対し、江戸指物は、武家・
 しょうにん かぶきやくしゃよう おおつく くわきり
 商人・歌舞伎役者用のものが多く作られ、桑や桐など
 もくめ げんざいりょう い そと みえな いぶぶん
 木目のきれいな原材料を活かし、外から見えない部分
 ほどぎじゅつ くし
 ほど技術を駆使しています。



⑱江戸更紗

えどさらさ えどじだいちゅうき まつき はってん
 江戸更紗は、江戸時代中期から末期にかけ発展しま
 した。かんだがわ とうきょう みず てつぶん おお
 神田川をはじめとする東京の水には鉄分が多く
 ぶく てつ せんりょう かがくはんのう どくとく しぶいろ
 含まれ、鉄と染料が化学反応をおこし、独特の渋い色
 そあ
 に染め上がります。



⑲東京本染ゆかた・

てぬぐい

かぶきじゅうはちばん すけろく もんべえ
 歌舞伎十八番の1つ「助六」では、かんぺら門兵衛
 がゆかた すがた とうじょう ゆあ よう いぶく
 がゆかた姿で登場します。湯上がり用の衣服である
 ゆかたは、せんとう ちょうにん みちか いき
 ゆかたは、銭湯が町人に身近になるにつれ、「粋」を
 たいせつ えど こ せんれん
 大切にする江戸っ子により、洗練されていきました。



②江戸切子

江戸切子の創始者とされる加賀屋久兵衛は、ガラス

製造が盛んだった大坂で修業し、今の日本橋大伝馬

町でビードロ屋を開きました。現在、江戸切子の工場

は、江東区と墨田区の2区に多くが集まっています。



②5 東京藤工芸

藤は東南アジアに生息するヤシの一種で、軽いけれど

も堅く弾力があります。その特性から、竹にはできない

「巻く」「結ぶ」ことができ、家具などに加工されて

て様々な場所で使われています。



②6 江戸刺繍

江戸町人が豊かになる中、より豪華な着物を求め、

染色技術や刺繍が発達していきました。日本刺繍に

は、江戸風・京風・加賀風がありますが、江戸刺繍は

空間を楽しむような刺繍をするのが特徴です。



とうきょうちょうきん
②⑧ 東京彫金

ぶし たいとう かたな よろい ぶく かざ つか
 武士が台頭すると刀や鎧などの武具の飾りに使わ
 れましたが、えどじだい きんこうし よこやそうみん
 江戸時代になると金工師の横谷宗珉が、
 ちょうみん まじ なか まちほり よ さくふう う
 町民との交わりの中で“町彫”と呼ばれる作風を生み
 だし、きせる ちょうにん つか どうぐ ちょうきん つか
 出し、煙管など町人が使う道具にも彫金が使われる
 ようになりました。



えどひょうぐ
③⑩ 江戸表具

ひょうぐ かみ めの のり は あ まきもの か しく
 表具とは、紙や布を糊で貼り合わせ、巻物や掛け軸、
 ぶすまなどを^{つく}作ることをいいます。ちょうにんぶんか はなひら
 町人文化が花開く
 なか さどう しょどう とお しょが えどちょうにん ひろ
 中で茶道や書道などを通して、書画が江戸町人に広く
 した
 親しまれるようになり、えどひょうぐ さか
 江戸表具が盛んになりました。



とうきょうしゃみせん
③① 東京三味線

えどじだいしょき かんえいねんかん いしむらおうみ
 江戸時代初期の寛永年間には、石村近江といった
 しゃみせん めいしょう あらわ しゃみせんづく はったつ
 三味線の名匠が現れ、三味線作りも発達しました。
 これにともない、かぶき ながうた ぎだゆう ときわす きよもと
 歌舞伎の長唄・義太夫・常磐津・清元・
 しんない ほうがく ちょうにん した
 新内といった邦楽が町人に親しまれるようになりま
 した。



とうきょうむじぞめ
③③ 東京無地染

江戸幕府により、町人は派手な色の着物を着ることを禁じられ、茶色や鼠色など無地染の着物が普段着になりました。“粋”を好む江戸の町人は、同じ色でも風合いなどを工夫し、「四十八茶百鼠」と言われるほど、様々な種類の色を作りだしました。



とうきょうしっぽう
③⑦ 東京七宝

江戸時代初期に、東京七宝の始祖である平田彦四郎が渡来人から七宝の技術を学び、幕府お抱えの職人として、刀の鍔など多くの名作を残しました。平田家の技術は明治時代初期までは門外不出とされました。



えどてがきちょうちん
④⑩ 江戸手描提灯

16世紀初めごろに提灯の原型となるものができ、江戸時代になると広く庶民にも使われるようになりました。提灯に描き入れる文字は江戸文字と言われ、神社やお寺に貼る干社札は、提灯職人が描いていました。



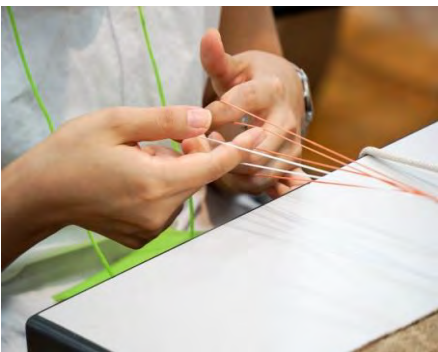
とうきょうようがさ
④1 東京洋傘

1854年^{ねん}にペリー^{にちべい わ しんじょうやくていけつ}が日米和親条約締結^{うら}のために浦
賀^がに來航^{らいこう}した際^{さい}、持ちこまれた^も洋傘^{ようがさ}が注^{ちゅう}目^{もく}を集めまし
た。東京^{とうきょう}洋傘^{ようがさ}は 1872年^{ねん}から本格的^{ほんかくてき}に製造^{せいぞう}されはじ
め、骨屋^{ほねや}、手元屋^{てもとや}、生地屋^{きじや}、それら^{それら}を組^くみ立^たてる洋傘^{ようがさ}職^{しやく}
人^{にん}による^{ぶんぎょう}分業^{おこな}で行^{おこな}われています。

しょくにん おし つく
職人さんに教えてもらって作ってみました！！



とうきょう
「東京くみひも」のゆびくみひもミサンガ
をつく
を作ってみました。ふくだたかしせんせい しやしん せんせい
と、ふくだりゅうた せんせい
と、福田隆太先生です。



あやとりのように、ゆび いと ひ
指に糸を引っかけてくみ
あ
上げてつくります。きき手ではないひだりて つか
左手の使い
かた
方がすごくむずかしく、なかなかうまくできま
せんでした。



ふくだりゅうた せんせい ゆび つか
福田隆太先生が「指をこう使うとうまくい
くよ」と、おし
コツを教えてくださいました。せんせい い
先生の言
うとおりにく
組んでいったら、じょうず
上手に組めるよう
になってうれしかったです。



ぶん
30分くらいで、ミサンガができました。自分
じぶん
でつくったのですごくうれしかったです。ずっ
とだいじ
大事にしたいと思います。おも